

# 君石遺跡

両内田地区県営圃場整備  
発掘調査報告書

1986

塩尻市教育委員会

## 序

君石遺跡は現在の県住君石団地を中心として広がり、昭和40年の団地造成時に行われた緊急発掘調査では縄文晩期～弥生時代の遺跡であることが明らかになっています。この度、長野県中信土地改良事務所所管の両内田地区県営ほ場整備事業がこの地域に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査を委託されたものであります。

発掘調査は7月中頃より8月上旬の酷暑炎天の中で行われました。調査の結果、数多くの遺構・遺物が確認され、今後該期の研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供することになりました。

本調査を実施するにあたり、関係役員の方々ならびに地元の皆さんには大変お世話になり厚く御礼申し上げます。また調査と整理に携わられた調査員の先生方をはじめとして多くの方々の御努力に対し、重ねて謝意を表するものであります。

昭和61年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優 一

## — 例 言 —

1. 本書は、昭和60年度両内田地区県営圃場整備事業に伴う、中信土地改良事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和60年7月15日から8月10日にわたって発掘調査が行われた塩尻市大字片丘君石地区における君石遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査経費については、中信土地改良事務所からの委託金および国庫・県費補助金による。
3. 本書の執筆は各調査員・調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。
4. 本書の編集は小林、鳥羽、伊東が行った。
5. 調査にあたり、両内田土地改良区の横山儀藤多理事長はじめ地元関係者の皆様の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。
6. 本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

# 目 次

序

例 言

第 I 章 調査状況	1
第 1 節 発掘調査に至る経過	1
第 2 節 調査体制	2
第 3 節 調査日誌	2
第 4 節 遺跡の状況と面積	4
第 II 章 遺跡周辺の環境	5
第 1 節 自然環境	5
第 2 節 周辺遺跡	5
第 III 章 遺跡の概要	9
第 1 節 遺跡の概要	9
第 2 節 発掘区の設定	9
第 IV 章 遺構	11
第 1 節 住居址	11
第 2 節 ロームマウンド	11
第 3 節 方形周溝墓	18
第 4 節 小堅穴	18
第 5 節 溝	23
第 V 章 遺物	24
第 1 節 土器	24
(1)縄文・弥生時代	24
(2)平安時代	24
第 2 節 石器	28
第 VI 章 過去の出土遺物	29
第 VII 章 まとめ	32

# 第 I 章 調査状況

## 第 1 節 発掘調査に至る経過

- 1月8日 昭和60年度文化財関係補助事業計画について（提出）
- 4月5日 昭和60年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
- 4月24日 昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
- 5月10日 昭和60年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
- 5月21日 両内田地区埋蔵文化財包蔵地区発掘調査委託契約について
- 5月27日 昭和60年度文化財保護事業県費補助金交付申請について（提出）
- 6月17日 昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
- 7月8日 埋蔵文化財包蔵地君石遺跡の発掘調査について（通知）
- 7月11日 市耕地林務課、市教育委員会、地権者による現地説明
- 8月3日 君石遺跡埋蔵文化財の取得について（届）
- 9月24日 君石遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

### 発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

- 2. 遺跡名 君石遺跡
- 4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業県営は場整備事業に先立ち600m<sup>2</sup>以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和60年8月15日までに終了する。調査報告書は昭和61年3月15日までに刊行するものとする。
- 5. 調査の作業日数 発掘作業15日 整理作業15日 合計30日
- 6. 調査に用する費用 発掘調査費全額4,000,000円 文化財農家負担軽減額(一)1,100,000円 計2,900,000円
- 7. 調査報告書作成部数 300部

## 第2節 調査体制

団 長	小松 優一 (塩尻市教育長)
担当者	伊東 直登 (長野県考古学会員、市教委)
調査員	小林 康男 (日本考古学協会員、市教委) 鳥羽 嘉彦 (長野県考古学会員、市教委) 寺内 隆夫 (下房考古研究会員)
調査補助員	奥原俊幸、掬川由里子、腰原典明、龍堅 守、中野達也、前田清彦、三村 洋、百瀬顕正。
参加者	池田貴江子、小野英幸、小松三枝子、小松幸美、小松義丸、小松静子、桜井栄子、桜井胤男、桜井洋子、清水年男、白木正富、千村哲也、中島房美、中野直久、古谷広樹、牧野内嘉津子、三澤茂子、村山 明、米久保勇、浅井 清、上條宮雄、清沢善治郎、高尾 至、田中理則、手塚好任、中垣内秋人、中林重男、中林善美江、中村 啓、中村ちか子、中村芳晴、樋口 彰、三石科雄、山崎 誠、米山米三郎、市川きぬえ、金田和子、中村ふき子、柳沢千寿子、山本敬子。
事務局	塩尻市教育長 小松優一 市教委総合文化センター所長 二木三郎 〃 文化教養担当課長 清水良次 〃 文化教養担当次長 原田 博 〃 平出遺跡考古博物館学芸員 小林康男 〃 文化教養担当主事 鳥羽嘉彦 〃 文化教養担当主事 伊東直登
協力者	両内田土地改良区理事長 横山儀藤多 両内田土地改良区工事委員長 村山与八郎 両内田土地改良区理事・地権者 桜井胤男 両内田土地改良区事務長 前澤三成司

## 第3節 調査日誌

昭和60年7月11日(木)曇時々雨 発掘調査区付近の表面踏査、試掘を行い、あわせて、耕地林務課、地権者との三者による現地協議により、調査の打ち合わせをする。試掘の結果、南西隅は深さ60cmで砂利層となり、湧水があったが、北側および東側は深さ30~50cmでローム層にあたった。表面採取は、黒曜石のフレーク1片のみ。

7月15日（月）晴 藤牧建設のバックフォー、ブルドーザーにて表土除去。西側中央部において、縄文時代晩期から弥生時代の土器片とともに黒色土の落ち込みがみられた。

7月16日（火）晴 テントおよび発掘器材を現地へ搬入。

7月18日（木）快晴 本日から本格的作業開始。参加者の受付終了後、清水文化教養担当課長の挨拶と、小林学芸員から経過説明を受ける。テント設営後、助簾による検出作業開始。

7月19日（金）曇一時雨 昨日に引き続き、鋤簾による検出作業を行う。攪乱により検出しにくい、住居址1軒とロームマウンド、小竪穴数基を確認。

7月20日（土）晴 検出作業。調査区南側で、東西一列にロームマウンド5基確認。東から1～5号としたうえで実測。外に小竪穴10数基と、方形周溝墓と思われる遺溝検出。4mグリッド東西A～G、南北1～11設定。

7月21日（日）定休日

7月22日（月）曇 住所址、小竪穴、ロームマウンドの掘下げ開始。住居址から土師、須恵器出土。平安時代の住居址と思われる。

7月23日（火）快晴 住居址から、土師および須恵器の完形出土。床および壁の一部検出。方形周溝墓主体部を半載掘下げ。覆土はコンテナに取り、ふるいにかけることとする。

7月24日（水）快晴 住居址床面、壁ともにほぼ検出。方形周溝墓主体部の土ふるい開始。小竪穴セクション図化。

7月25日（木）快晴 住居址遺物取上。4号ロームマウンド、セクション図化。方形周溝墓主体部セクション図化。土ふるいによる遺物なし。ローム層が検出されない調査区南側に50cm巾トレンチ5本を設定し掘り下げを開始する。塩尻日報記者取材のため来訪。

7月26日（金）快晴 住居址東西セクション図化。1、2号ロームマウンド、セクション図化。3号ロームマウンド焼土平面図測図。4号小竪穴から縄文土器片出土。

7月27日（土）雨 作業中止。

7月28日（日）定休日

7月29日（月）快晴 住居址南北セクション図化。十字ベルト除去により、床直状態で須恵の杯完形出土。3号ロームマウンド遺物取上。南トレンチは、深さ20～40cm程でローム粒混入の砂利層となり、水の流れた跡と思われる。

7月30日（火）快晴 住居址、遺物取上。1号ロームマウンド床面精査。5号ロームマウンドセクション終了。

7月31日（水）快晴 住居址のカマド平面実測終了後、半載しセクション図化。カマド内に土師器片多数出土。ロームマウンド掘下げを進める。連日猛暑が続く。

8月1日（木）快晴 住居址の遺物取上、床面精査。3号ロームマウンド、セクション図化。小竪穴の平面図測図開始。

8月2日（金）快晴 昨日作業終了後の集中豪雨によりテントが倒壊してしまったため、午前中その後始末と新たに搬入したテントの設営を行う。雨による地表面が検出作業に適した状態となったため、再度鋤簾による検出作業を行い、小竪穴らしい落ち込み4ヶ所を確認する。

8月3日(土) 快晴 住居址床面精査。調査区南側の帯状の落ち込み部分全面掘下げ。

8月4日(日) 定休日

8月5日(月) 晴 住居址床面精査後、平面図測図。調査区全体図測図。

8月6日(火) 曇 住居址写真撮影。3号ロームマウンド焼土図化後掘下げ。4号ロームマウンド、平面図測図。

8月7日(水) 曇 調査区全体写真撮影。3号ロームマウンド平面図測図。方形周溝墓平面図測図。あまり攪乱されていない北側Cグリッド上に2×2mトレンチ4ヶ所を設定し、土層および旧石器文化調査のための掘下げ開始。

8月8日(木) 晴 溝状遺溝のセクション図化。Bグリッド上にも2×2mトレンチ2ヶ所を設定し、計6ヶ所を掘下げる。遺物の出土なし。

8月9日(金) 快晴 E-3グリッドに南北1×4mのトレンチを設定し、調査区南側と北側の土層差違調査のため掘下げる。

8月10日(土) 晴 C-7およびE-3トレンチでセクション図化。ローム掘下げトレンチの埋めもどし後、テント解体、器材撤収。

整理作業は8～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

## 第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現 況	種 類	全体面積	事業対称面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
君 石	塩尻市大字片丘 4817番地	畑	包蔵地	30,000 m <sup>2</sup>	20,000 m <sup>2</sup>	600 m <sup>2</sup>	1,200 m <sup>2</sup>	4,000,000 円

第1表 発掘調査経過表

遺跡名	月	7	8	9～2	主 な 遺 構	主 な 遺 物
君 石		15 発掘	10 遺物整理 図面作成 原稿執筆		平安時代住居址 1 ロームマウンド 5 方形周溝墓 1 小 豎 穴 17	縄文晩期～弥生土器、石器 土師器、須恵器

(事務局)

## 第II章 遺跡周辺の環境

### 第1節 自然環境(第1図、第2図)

君石遺跡は塩尻市の北東部、片丘地区にあり、県道新茶屋塩尻線(通称、赤城線)沿いにある県住君石団地の東側に展開する。赤城線を挟んで西側には市住渋沢団地が建つ渋沢遺跡があり、また僅か30m北側に小場ヶ沢を挟んで松本市境があり、その北側に独立丘陵の赤城山が続いている。

ここは高ボッチ山塊の西麓斜面に発達した片丘丘陵の末端部にあたり、平均勾配4°と相当急な斜面を西へ向けている。また山麓から流下する群小の河川はこの丘陵上に幾多の複合扇状地を形成させ、松本盆地南部の東縁部を北流する田川へと注ぎ込んでいる。

君石遺跡の立地する丘陵は、小場ヶ沢川と大沢によって形成された広範囲の複合扇状地上にあり、日当りのよいテラス状の緩斜面をなしている。発掘区はこの丘陵の北縁部、すなわち小場ヶ沢川を臨む位置にあり、北側は急な斜面をもって沢へ低下している。また南側にも微地形の窪地帯があり現地表面ではあまり目立たないが降雨時には地表流水として小川が発生する。発掘区を設けた地点はこれらの地形により小規模な尾根状地形を呈しており、遺跡の立地としては好条件を有している。なお昭和40年に行われた本遺跡の発掘区は現在の団地の東側で今回の調査区とは上記の窪地帯を挟んでいる。現在は畑に開墾され均らされているが、当時はおそらく地形の起伏がはっきりとしており両者の間に微妙な影響を与えたものと思われる。標高は682m~685mである。

遺跡付近には厚いローム層を基盤として上位に黒褐色土(表土)が被覆している。表土は調査区の東側で60cm厚を測るが、南側および西側では僅か30cmでローム層が顔を覗かせる。これは西側の窪地帯に関与する臨時の地表流水により表土が局所的に浸食、削平されたことによるものであろう。耕作のためか僅かにローム粒を含むが、総じて攪乱は少なく比較的保存状態のよい覆土となっている。(鳥羽嘉彦)

### 第2節 周辺遺跡(第1図)

松本平東南部を走る筑摩山麓から田川流域にかけては有数の遺跡稠密地帯となっており、毎年行なわれる幾多の発掘調査により、その様子は徐々に明らかになってきつつある。地理的・時間的断続性を経ながらも當まれ続けて来た生活跡を、遺跡により以下概観してみたい。

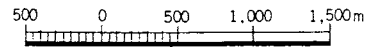
先土器時代では、君石から約1km東方の小丸山、1.5km北方の赤木山、700m西方で田川をはさんで対岸に位置する丘中学校、北ノ原、南方では片丘地区と隣接する向陽台、さらにその南方で筑摩山地東麓南端に所在する柿沢、池ノ入、青木沢等で遺物が出土している。まだ充分とはいえない調査範囲でありながら、この地域がかなり濃密な生活域だったことがすでに伺われる。

縄文時代早期では、君石遺跡近在にその例はなく、片丘区南内田に隣接する松本市内田の五斗



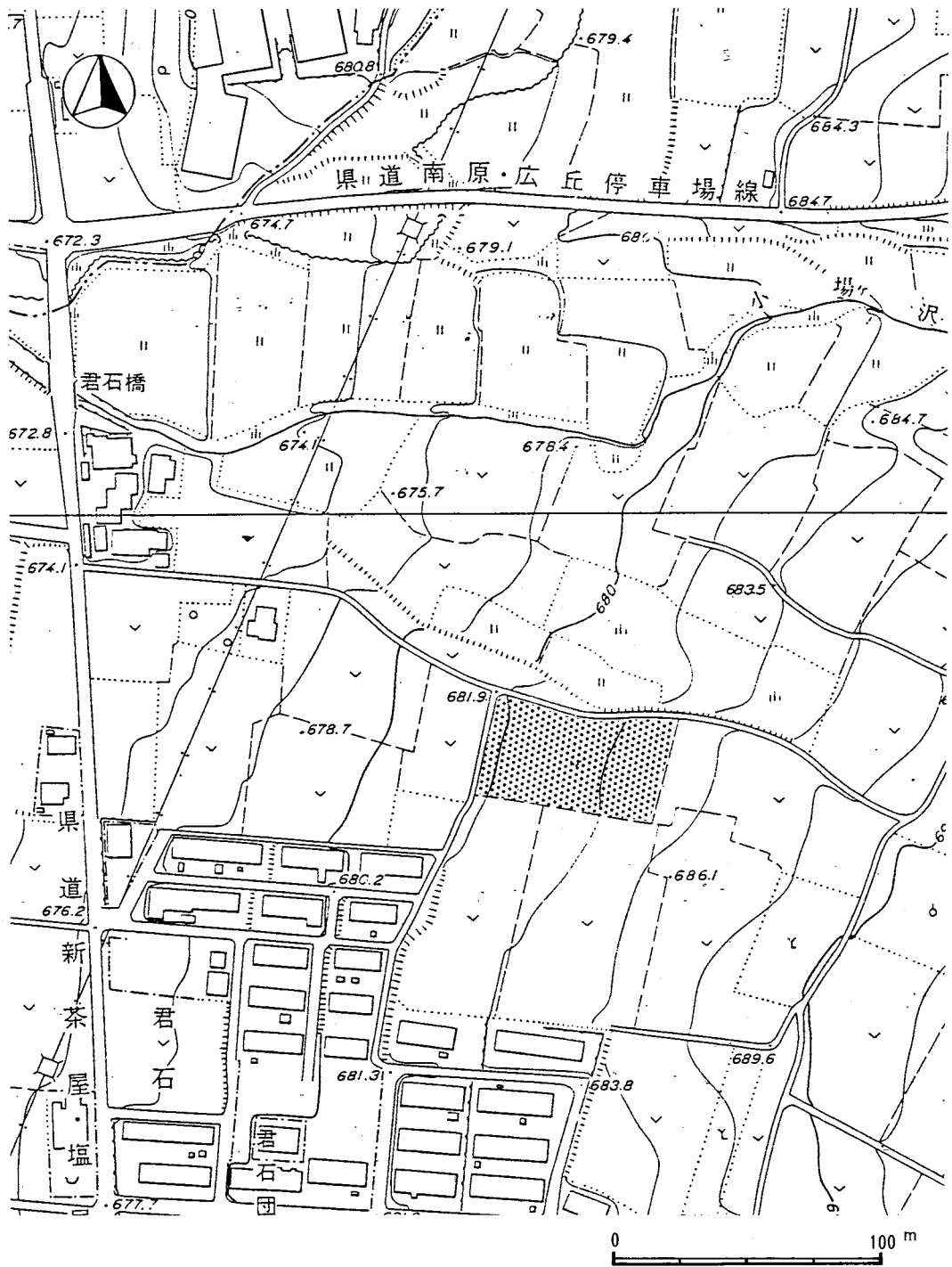


1 : 50,000



- |       |        |        |      |       |
|-------|--------|--------|------|-------|
| 1 君石  | 2 白樺   | 3 丘中学校 | 4 高田 | 5 山ノ神 |
| 6 内田原 | 7 小丸山  | 8 舅屋敷  | 9 組原 | 10 和手 |
| 11 中挾 | 12 向陽台 |        |      |       |

第1図 君石遺跡周辺遺跡位置図



第2図 君石遺跡調査地区図

林、釈迦堂、片丘南能井の竜神で押型文土器が得られている外、向陽台で多量の押型文土器、石器類とともに住居址4軒が検出され、その南方1.5km程には、条痕文系土器を伴う住居址5軒を検出した堂の前、これに隣接し、多量の押型文土器を出土した福沢がある。

前期になると、片丘地区だけでも中原、舅屋敷、竹ノ花、小丸山、八幡原、大林、富士塚、女夫山ノ神など多くの遺跡がある。前後2回にわたり調査された舅屋敷では、10軒の住居址のほか小竪穴42、集石遺溝とともに多量の土器、石器類が出土し、中原では住居址1軒、女夫山ノ神では初頭の住居址1軒と末葉の住居址3軒が検出されている。

中期に入ると遺跡は急増し、この時期全般が筑摩山地東麓を一大生活空間として保有し、大集落がいたる所に所在していたことを伺わせる。中でも北熊井の俎原では、ほぼ全期にわたる計147軒の住居址が円環状に検出され、この時期の集落構成解明のうえで注目される。またこの北東隣の沢を隔てた台地上にある中原では、勝坂期1軒と加曾利E期3軒の住居址が、小丸山では勝坂期5軒と加曾利E期9軒の住居址がそれぞれ検出されている。

後、晩期の遺跡はこの地域でも例にもれず急減し、特に片丘地区では、今回の君石で若干の土器片が出土しているのみで、あとは松本市のエリ穴、石行、別方などの数遺跡が知られる程度である。

弥生時代では、筑摩山地東麓を中心とした生活域から田川流域を中心とした生活域へと移行して行く。君石に隣接する渋沢、その北西田川右岸に位置する花見で後期の土器片が出土し、対岸の丘中学校と前記向陽台では方形周溝墓が調査されている外、北ノ原、高出、向井、赤木山、上林、裏ノ原、社宮寺等、山麓地帯では犬原、中原、横町、狐塚、久保在家などで遺物が採集されている。

古墳時代では白樺で住居址が検出され、平安時代となると君石の外、丘中学校で5軒、丘中学校南で15軒、高出で1軒、向井で85軒、片丘の舅屋敷で6軒、内田原で18軒の住居址が検出され、花見、高田、野村、黒崖、一夜窪、吉田川西、別方、渋沢、境沢、矢口、久保社屋、鍛冶屋敷、別当原、無量庵、二本木、今泉、俎原、中挾、和手等、縄文中期を思わせる濃密さをもって所在している。

(伊東直登)

## 第Ⅲ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の概要（第3図）

今回発掘調査の対象となった君石遺跡は、塩尻市東北部の片丘地区、県住君石団地の東側に位置し、調査面積は1200m<sup>2</sup>に及んだ。ここは片丘丘陵の末端部にあたり、小場ヶ沢川と大沢によって形成された複合扇状地である。

調査の結果、遺構は、平安住居1軒、小竪穴17基、ロームマウンド5基、方形周溝墓1基が確認でき、これらに伴って縄文時代前期の土器片、弥生時代の土器片、平安時代の半完形の土師器、須恵器、鉄製品が出土した。しかし、住居外から出土した遺物は量的には、たいへん少なかった。

住居は調査区の西端に確認され、須恵器の高台付坏、広口甕、土師器坏、甕、刀子片などが出土し、また構造的にも典型的な平安住居だと言える。

この住居の東側に、小竪穴が集中して確認できた。遺物が出土したものとしては、縄文土器数片が出土した11Sがあげられる。

また、調査地区の中心部には、方形周溝墓が確認できたが、小竪穴やロームマウンドとの切り合い、あるいは周溝の不明確さによって、全体像は判然としない。

以上、概略を記したが、個々については、他章を参照してもらいたい。

（腰原典明）

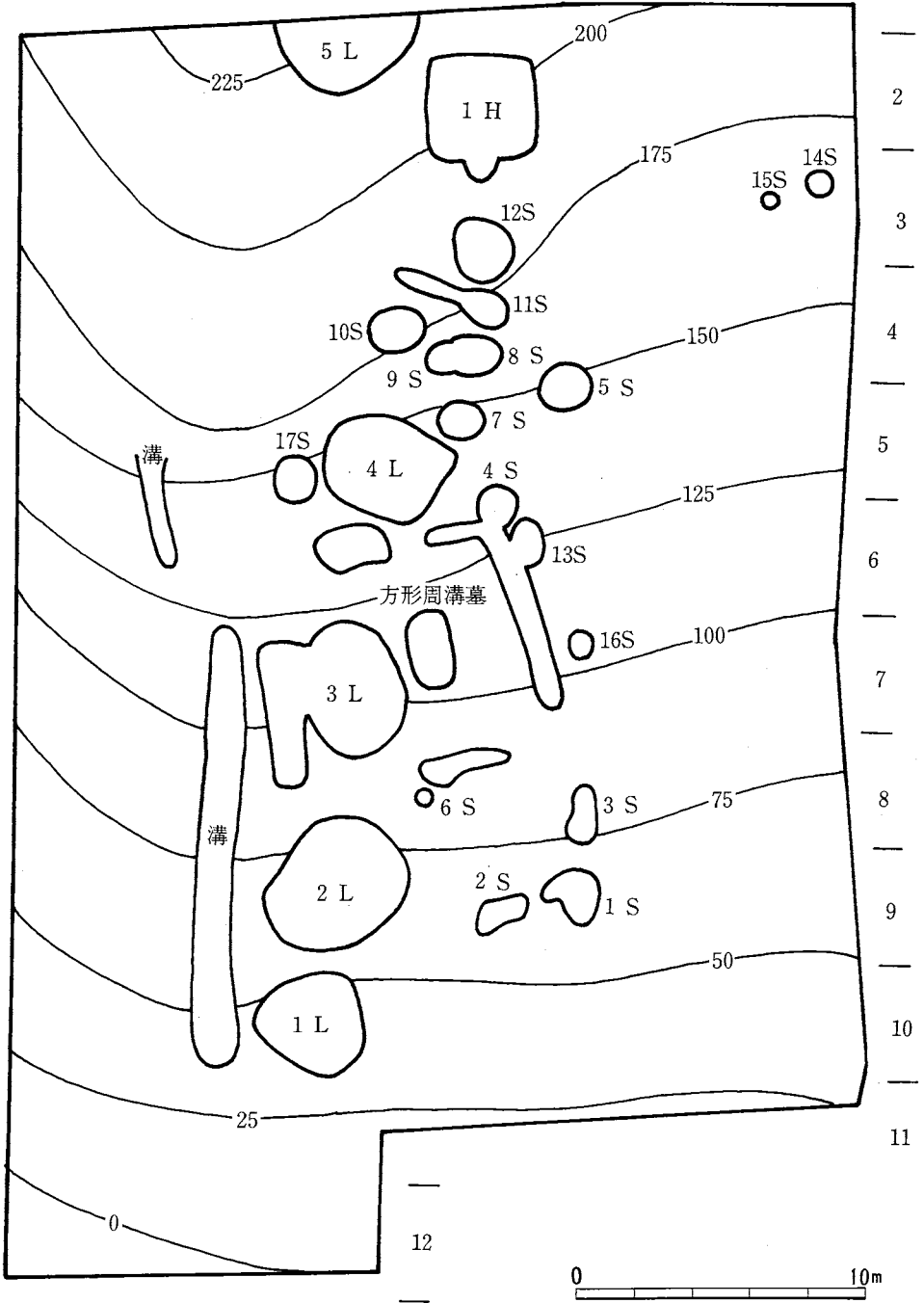
### 第2節 発掘区の設定

片丘丘陵斜面西端に位置する君石遺跡の北側部分が、今回の発掘調査対象となり、調査区としては君石団地北東の畑地に設定された。発掘調査に先だつ試掘調査によれば、調査区北側全体から東側にかけては25～30cmの深さで褐色のローム層が検出されたが、南側は暗褐色土の堆積が40～50cmと深く、その下層ではローム粒を主体としながらも礫、砂利の著しい混入がみられ、かなりの攪乱が推測された。

調査は、バックフォーおよびブルトナーによる表土除去を行なった後、グリッド設定をした。グリッドは4mの間隔で、北から南へ向かってA～H、西から東へ向かって1～12を設定した。発掘区総面積は1200m<sup>2</sup>である。

（伊東直登）

I | H | G | F | E | D | C | B |



第3図 君石遺跡遺構全体図

## 第Ⅳ章 遺 構

### 第1節 住 居 址 (第4図)

本址は今回の発掘調査で唯一検出された住居址であり、調査地区西端部中央に位置する。よって本址は住居址群の東端とも考えられ、西側の調査区外地に住居址がある可能性も強い。

本址の遺存状態は良く、ほぼ原形を保っていると言える。平面プランは南北3.7m×東西3.5mの隅丸方形を呈する。掘り込み面はローム層であり、壁は四周ともほぼ垂直に掘り込まれており良好である。壁高は北壁、南壁、東壁で40cm、西壁で36cmを測る。周溝は幅約10cm、深さ5cm程度の良好な掘り込みであり、西壁北西側で壁より約20cm離れる以外、壁沿いを巡っている。床面は全般的に平滑で堅緻である。ピットは四隅、周溝際に検出され、位置的にすべて支柱穴と思われる。寸法はP<sub>1</sub>: 35×30、-18cm、P<sub>2</sub>: 73×40、-27cm、P<sub>3</sub>: 45×57、-32cm、P<sub>4</sub>: 70×75、-50cmを測り、平面形状は4基とも不整形をなす。また、西壁中央で壁面を切り込んで掘り込まれたピット(P<sub>5</sub>)が検出された。覆土の状態からみて、本址に付随するものと思われるが、本ピットの性格は判断できない。尚、周溝は一旦P<sub>5</sub>中に入り消える。寸法は110×72、-30cmを測る。カマドは東壁中央、やや南よりに構築されている。石組み粘土カマドであり、間口100cm、奥行110cmを測る。石組み、粘土郭、カマド内の支柱石も良好な状態を保って残存していた。焼土、灰、ともに焚口付近にかなり厚い堆積が見られた。

本址より出土した主な遺物は須恵器の高台付坏、広口甕、土師器坏、甕、刀子片などである。ここでは遺物の詳細は省略するが、かなりの好資料を提供したと言えよう。尚、これらの遺物より、本址は平安時代前半9世紀後半から10世紀前半に位置づけられよう。

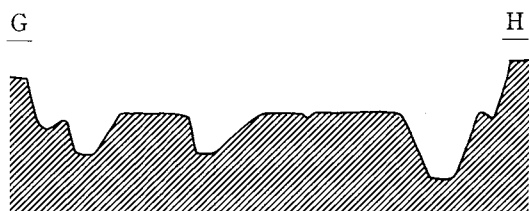
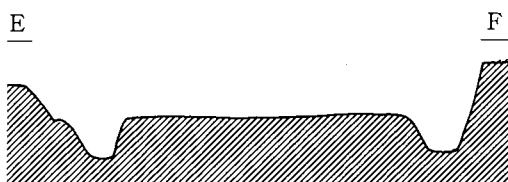
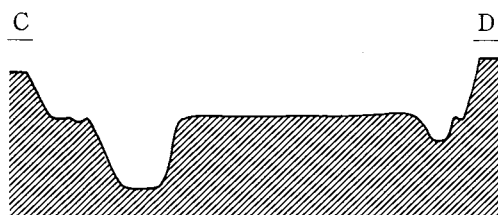
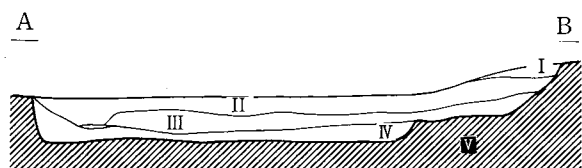
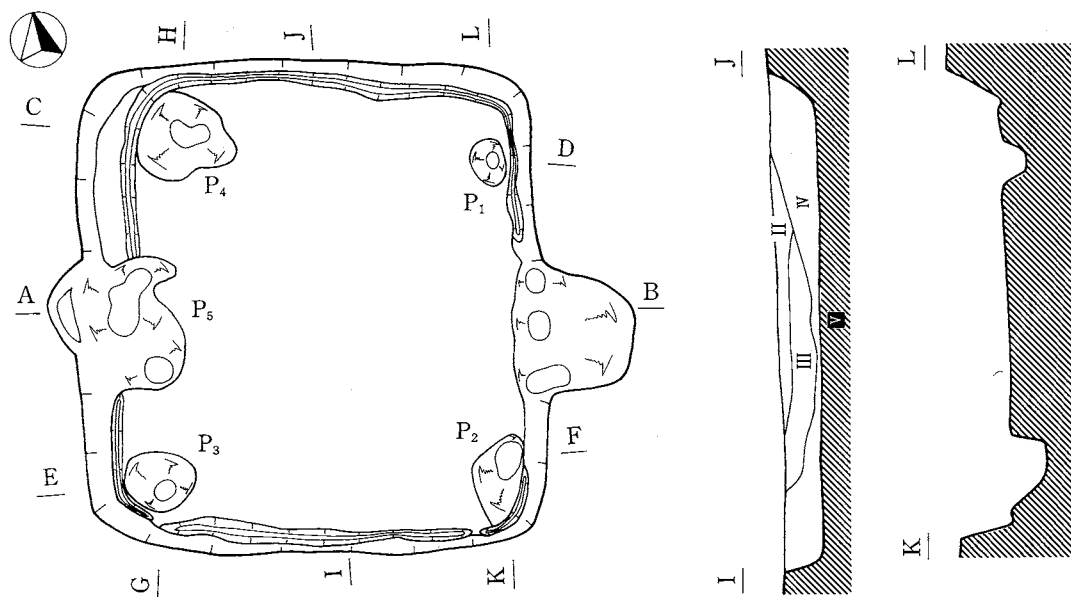
(龍堅 守)

### 第2節 ロームマウンド

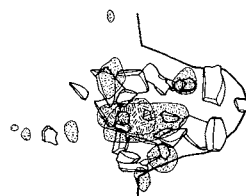
#### (1) 第1号ロームマウンド (第5図)

ロームマウンドは、調査区南側Fグリッドを中心とした区域の、ローム粒混入砂利層内で東西一列に検出されたが、第1号ロームマウンドは、最も東側のF-10グリッドで検出された。検出面において、褐色ローム面中に黒褐色土の落ち込みが円形の黄褐色ローム土を取り囲むように、ほぼ円形に認められたため、ロームマウンドと推察された。地層の観察記録化のため東西に半截線を設定し、初めに黒褐色土の掘下げにより当該層が中央ローム土下に入り込んで堆積していることを確認した後、中央部も半截し、セクション図化後全掘した。

プランは東西346cm、南北354cmで、落ち込みは2段になっている。壁は20cm前後のほぼ垂直で、更に中央部に直径170cm前後、深さ20cm程の播鉢状の落ち込みが続いている。底面は不整形で起状がみられ、中央の落ち込み部分には直径10cm程の礫が集中してみられた。覆土の堆積状態



- I : 赤褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 黒褐色土
- IV : 暗褐色土 (ローム粒多数混入)
- V : ローム

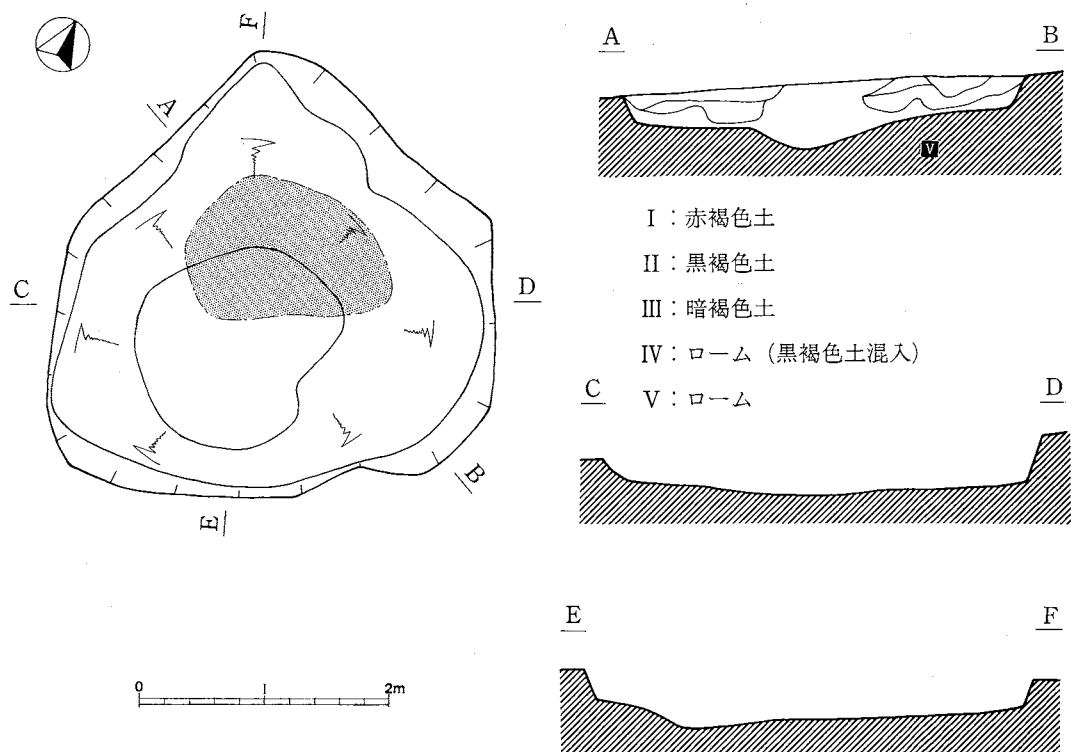


■ 焼土

■ 灰

0 1 2m

第4図 君石遺跡住居址



第5図 第1号ロームマウンド

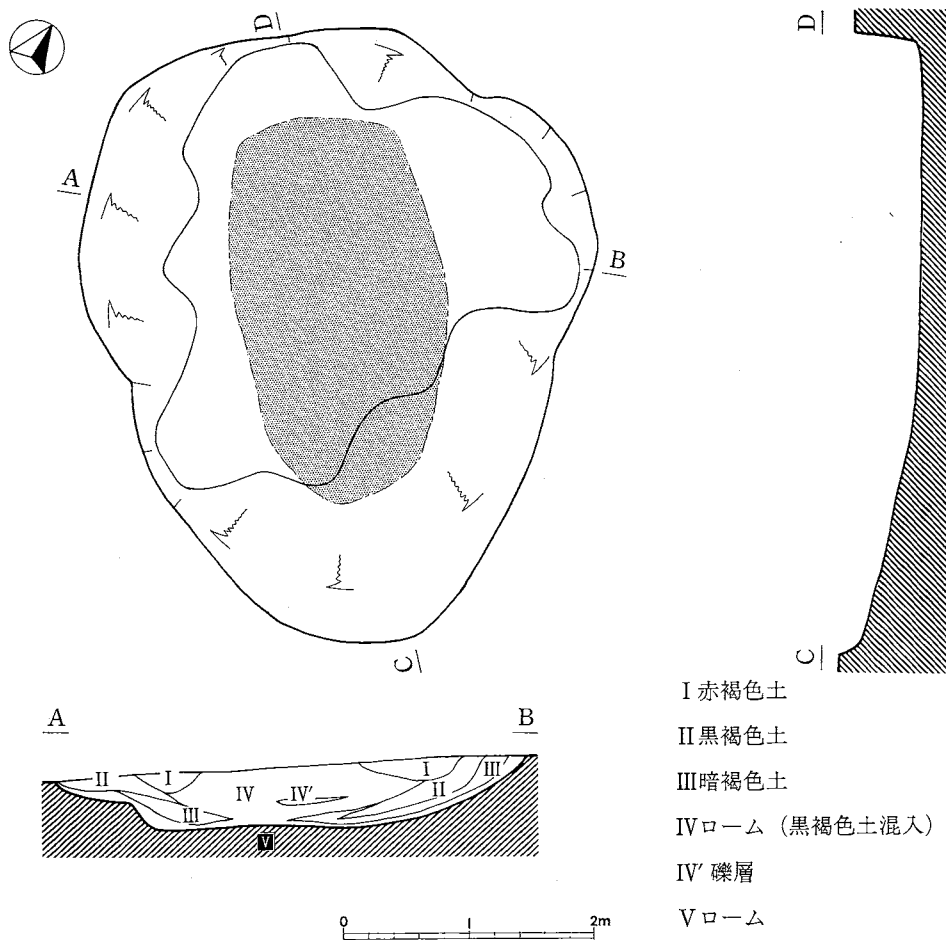
は、中央に上面で東西150cm、南北100cmほどの楕円形の礫混入ローム土が下部を地山に接続して存在し、周囲を上層が黒褐色、下層が暗褐色の層が取り巻き、東側において中央のローム下に約20cmの入り込みがみられ、この上層には若干の炭化物を混入する赤褐色土が存在した。

(2) 第2号ロームマウンド (第6図)

E-9、F-9グリッドで検出され、第1号ロームマウンドの西1.3mに存在する。1号と同様に、地山のローム土に比して明らかに黄色いローム土の周囲に、環状の赤褐色土ないし黒褐色土が認められ、ロームマウンドと推察されたため半載してセクション図化後全掘した。

東西405cm、南北485cmの楕円形プランを呈し、落ち込みは東から北側でほぼ垂直となり、南側はなだらかな揺鉢状、西側で2段となっており、底面は最も深い部分で検出面から約55cmを計る。土層は、中央に検出された東西170cm、南北300cmのローム土が底面を地山に接してレンズ状に堆積し、その周囲を下層から暗褐色土、黒褐色土、弱干の炭化物を含有する赤褐色土が混入し、特に中央のローム土中、底部から3分の1ほどの部分と、ロームマウンド底部の最も深い部分には直径10cmほどの礫が層として観察しうるほど密に検出された。





第6図 第2号ロームマウンド

### (3) 第3号ロームマウンド (第7図)

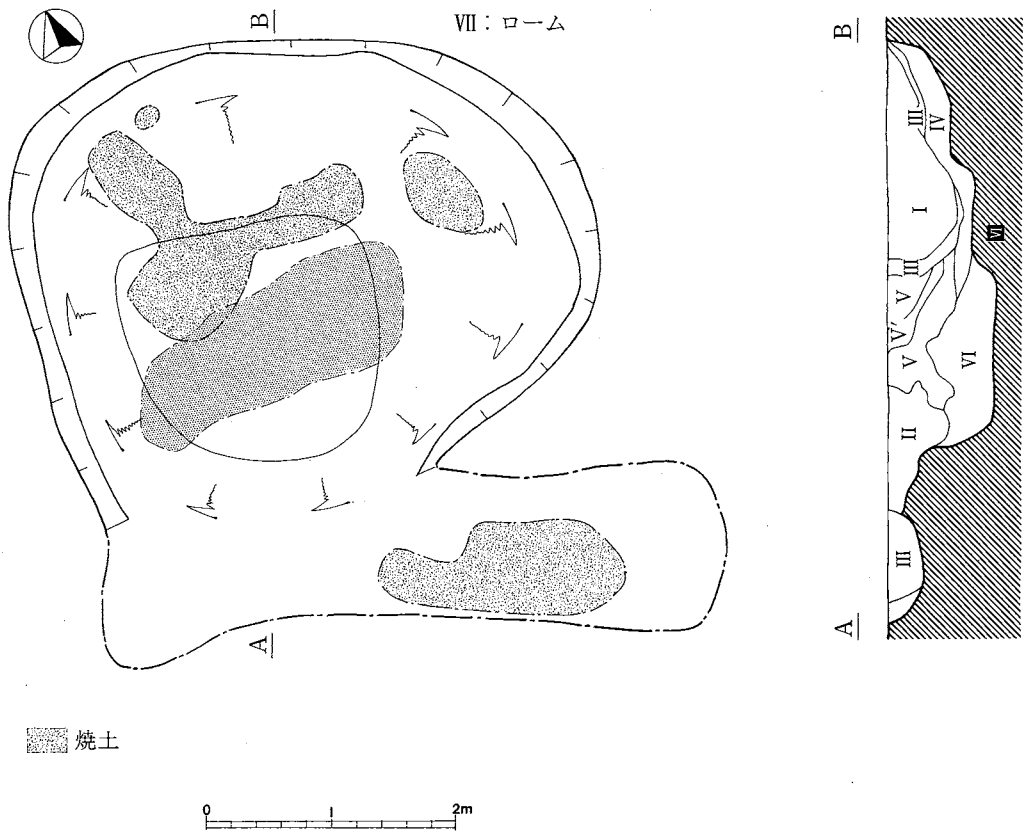
第2号ロームマウンドの西2m、E-8、9、F-8、9グリッドにわたって検出された。当該ロームマウンドは、本調査で検出された方形周溝墓中に存在し、南側で方形周溝墓南周溝と切り合い、北側約50cmに主体部が隣接する。検出面において、周囲のローム土より黄色がかった礫混入ローム土が東西225cm、南北75cmの楕円形で検出され、これを取り巻く形で黒褐色土ないし茶褐色土の落ち込みが見られた。検出面での様相は、ほぼ他のロームマウンドと類似してはいたが、北側黒褐色土中において焼土の塊と数片の土器片が出土し、なんらかの人為的遺構の可能性を示唆していた点で他と相違していた。調査は方形周溝墓との切り合いと、焼土層記録化のために南北の半截とし、セクション図化後全掘した。

プランは東西455cmで、南北は切り合いのため不明確だが約380cmで、やや楕円形を呈する。落ち込みは東から北側で2段のテラス状になり、南から西側は擂鉢状となっている。底面は西寄りに一段低く、検出面から85cmの深さを計り、鉄分の沈殿による赤茶けた砂礫層となっており、過

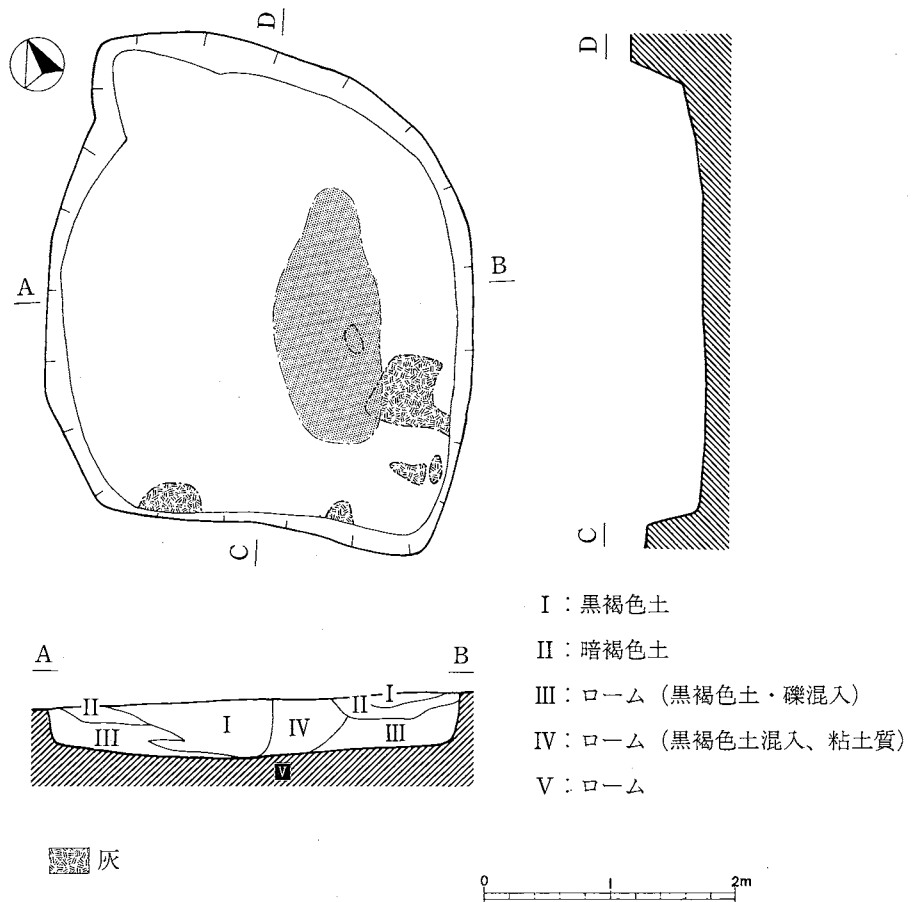
去における水の影響が推察された。土層は中央の黄褐色ローム土を地山と類似したローム土が取り巻き、その下に礫を多数混入するローム土が地山と接して底部を形成している。その周囲は粘性の強い茶褐色土層が取り巻き、焼土、炭化物を含有する黒褐色土層は、北側に最も厚い所で53 cmの層として把握された。方形周溝墓の周溝との切り合いは、周溝がロームマウンドの茶褐色土層を切る形で検出され、焼土ブロックの層は、セクションから当該層がロームマウンドを切り込んでいる可能性は看取しうるものの、ロームマウンド構成過程での因果関係解明材料とはなりにくく、またロームマウンドそのものが人為的遺溝であることは示唆しえないと思われる。

焼土中からは縄文中期の土器片が出土している。

- I：黒褐色土（焼土含有）
- II：暗褐色土
- III：茶褐色土
- IV：ローム（暗褐色土多混入）
- V：ローム（粘土質）
- V'：ローム（Vに小礫混入）
- VI：ローム（礫混入）
- VII：ローム



第7図 第3号ロームマウンド



第8図 第4号ロームマウンド

(4) 第4号ロームマウンド (第8図)

第3号ロームマウンドの西3.5m、E-5、F-5グリッドで検出され、東に方形周溝墓、南に17号小竪穴、北に7号小竪穴がやや離れて存在している。検出面において東西65cm、南北195cmの黄褐色ローム土を取り巻く形で黒褐色土の落ち込みがみられ、東西に半截し、セクション図化後全掘した。

東西375cm、南北470cmの偶丸方形プランを呈し、北側は丸みをおびている。壁はほぼ垂直に一周し、底面も不整形ながら他のロームマウンドに比して平坦であり、大きな特徴となっている。土層は、中央に地山に接した礫混入の黄褐色土が西に流れた形で存在し、その周囲を検出時に確認された黒褐色土と、その下層を構成する暗褐色土が取り巻き、さらにこの下層で、レンズ状に1cm大の礫を多く含有する褐色ローム土層が存在している。地山との境は、粘土質の灰白色土が薄い膜のように一面にみられた。

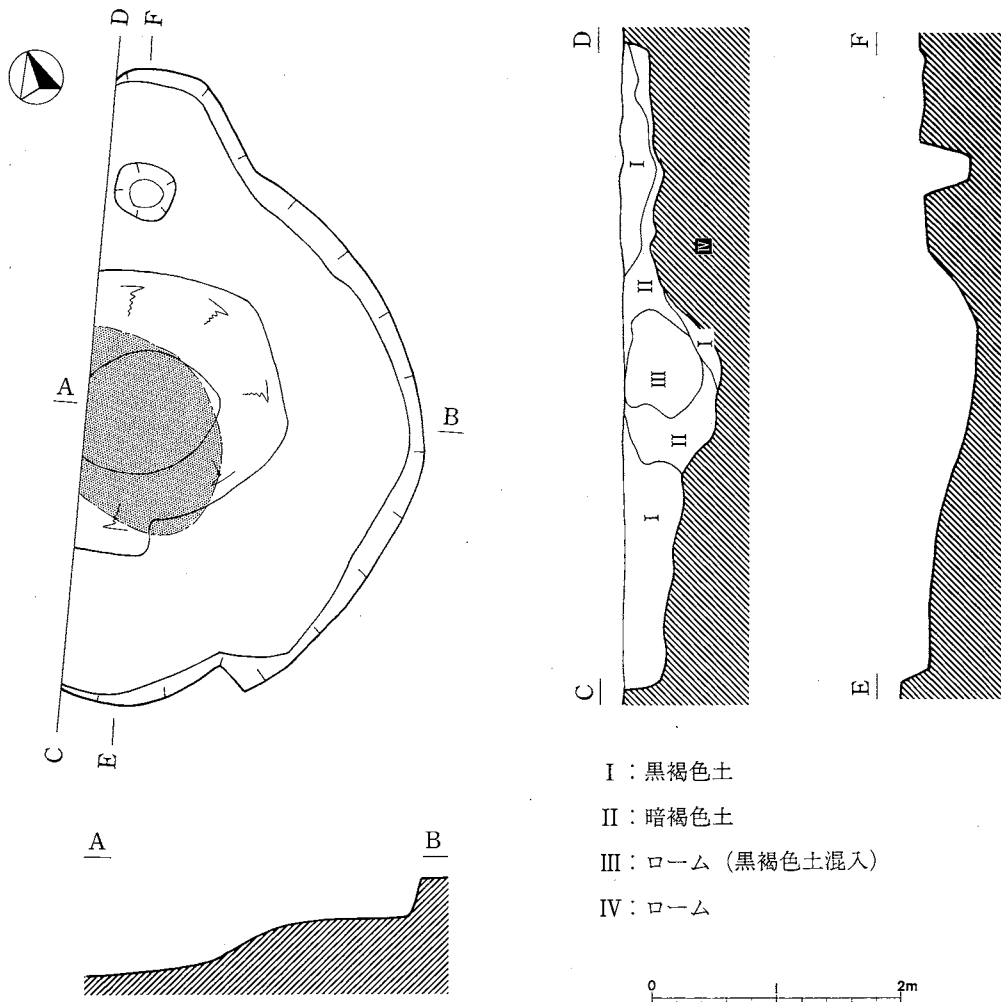
(5) 第5号ロームマウンド (第9号)

E-2、F-2グリッドで検出されたが、西側2分の1ほどは調査区域外のため未調査である。

北東隣には1号住居址が存在するが、最も近い4号ロームマウンドから13mと、他の4基から若干離れた位置にある。確認面で南北170cmの黄褐色ローム土を環状に取り巻く形で黒褐色土の落ち込みが検出されたためロームマウンドと判断し、調査区境で掘り下げ、セクション図化した。

プランは南北505cmで、外周がほぼ円形であることから東西も同規模と思われる。検出された5基のロームマウンド中最大級のものと思われる。落ち込みは2段で、上段は比較的平坦な地山が検出され、下段底部に向かって播鉢状を呈し、最深部は砂礫層で深さ80cmを計る。また上段北側には深さ30cmほどのピットが検出されたが性格は判然としない。土層については、中央のローム土が厚さ60cmの塊で検出され、地上との間に黒褐色土および暗褐色土が20cmほど堆積しているという点で他と様相を異にしている。再堆積ローム土の周囲を暗褐色土が取り巻き、その周囲を黒褐色土が厚く堆積しており、攪乱がほとんど見られない保存状態良好の土層である。

(伊東直登)



第9号 第5号ロームマウンド

### 第3節 方形周溝墓（第10図）

今回の調査区の中央部に位置し、東側に4L、西側に2Lと隣接し、また、3Lを内包している。平面形は、南北10m、東西85mの隅丸方形を呈している。

周溝は、全周しておらず、東西南北に断片的に存在するのみである。北溝は、幅90～120cm、確認面からの深さは、16～28cmであり、中央部が2段になっている。また4S、13Sを切っており、16Sと隣接している。東溝は、幅60～90cm、確認面からの深さは4～30cm、長さは3mであり、中央部が2段になっている。南溝は、幅120cm、確認面からの深さ24～30cmに長さは約5mで、3Lを切っている。西溝は2つに分かれ、一方は北溝と連結する部分で、幅40cm、深さ17cmであり、他方は、幅85～90cm、深さ14～16cm、長さ2.7cmで、底面はほぼ平坦である。担である。

このように、周溝は断絶的に存在するので、その陸橋の位置を決定するに至らなかった。

主体部は、中央北よりに位置し、1基確認された。主軸方向はN-90°-Eを示している。土壌は東西約245cm、南北130～145cmで確認面から約25～30cm掘り込んでおり、断面形は、たらい形である。底面は平坦で、やや西側に傾いている。また、あまり堅質ではないので、層相より判断した。覆土には、ローム粒、ロームブロックを含み、上層には焼土も混入していたが、これは、方形周溝墓とは関係ないものと考えられる。

遺物等は、特に出土しなかったため、この方形周溝墓の時期は明らかではない。

（腰原典明）

### 第4節 小 豎 穴（第11図、第12図、第13図）

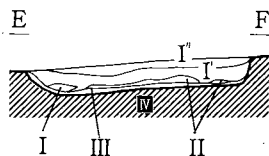
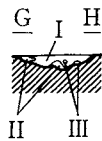
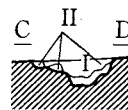
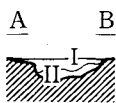
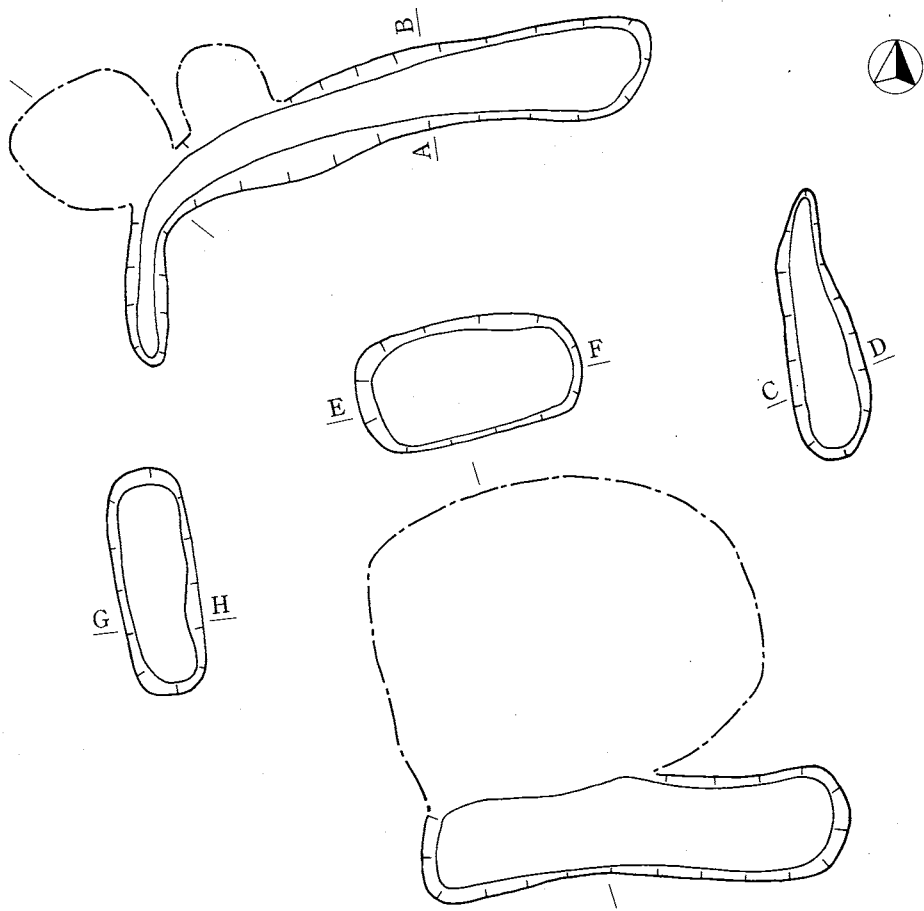
全回の調査で、全部で17基検出され、調査区域の中心部にかたまって見られる。特にE、Fグリットの3、4、5、即ち1号住居の東側に集中している。

形態は、平面形が円形または楕円で、断面形は、大半がタライ状であり、播針状のものは2基確認できたのみであった。深さは、20～40cmと浅いものであった。

この中で特筆すべきものは11Sである。覆土には、II層、III層にかけて縄文土器片が4片遺存していた。よって11Sは、縄文前期半ばに属するものと推察される。

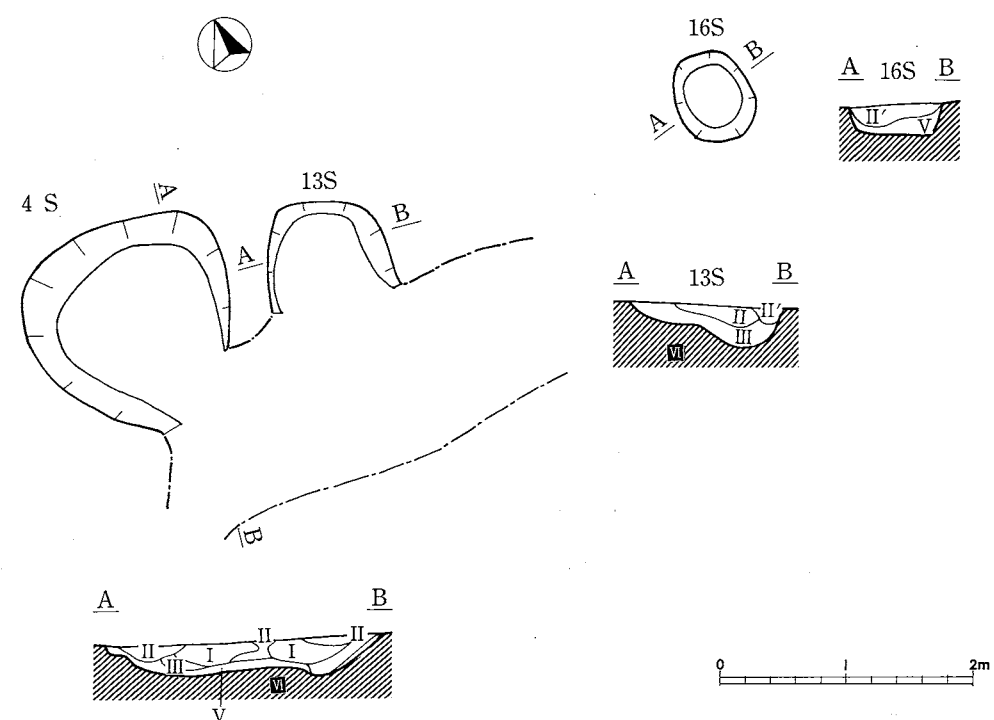
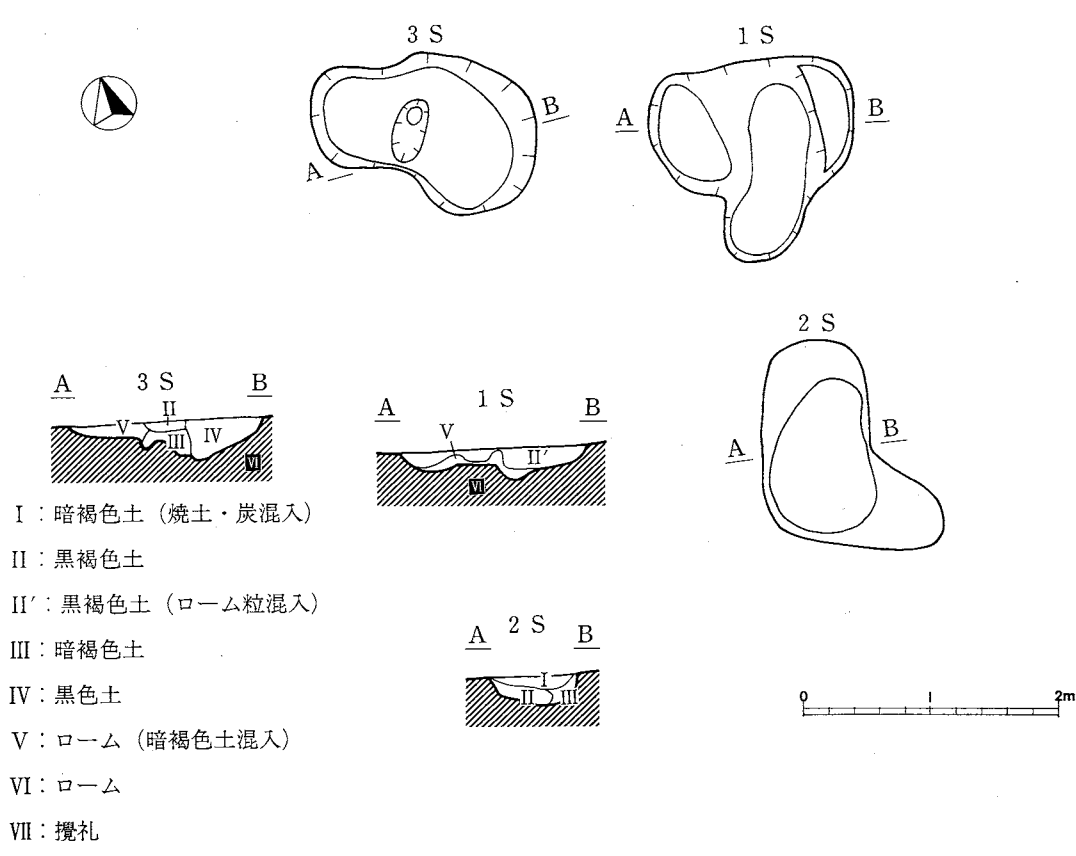
以上、概略を記したが、個々については、第2表を参照されたい。

（腰原典明）



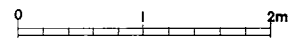
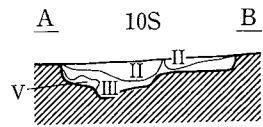
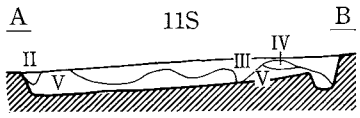
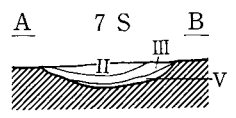
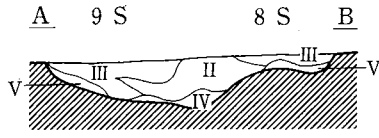
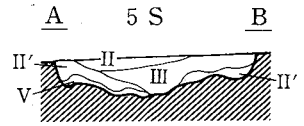
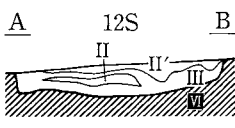
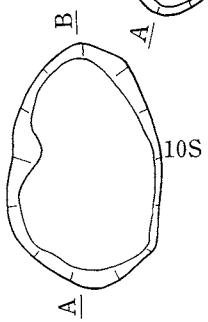
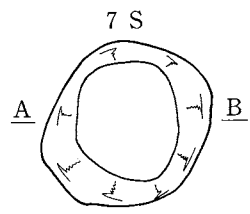
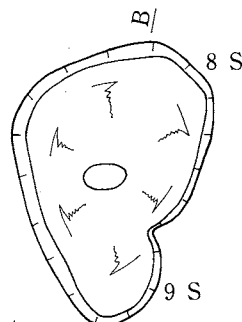
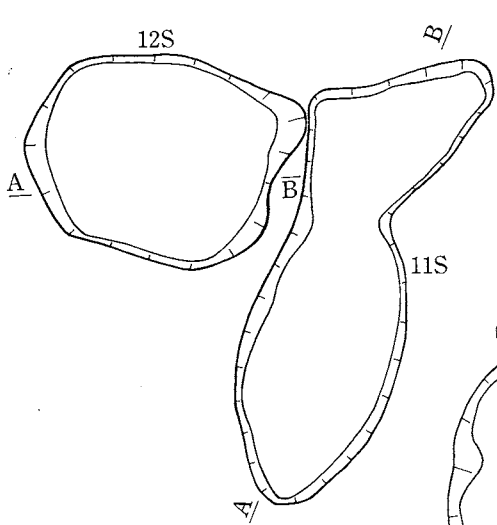
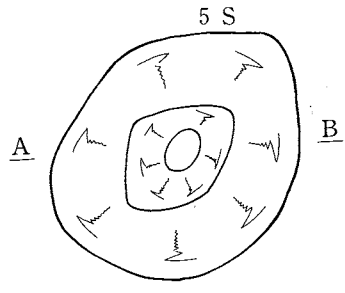
- I : 黒褐色土
- I' : 黒褐色土 (ローム粒少量混入)
- II'' : 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒混入)
- II : 暗褐色土
- III : 暗褐色土 (ローム混入)
- IV : ローム

第10図 方形周溝墓



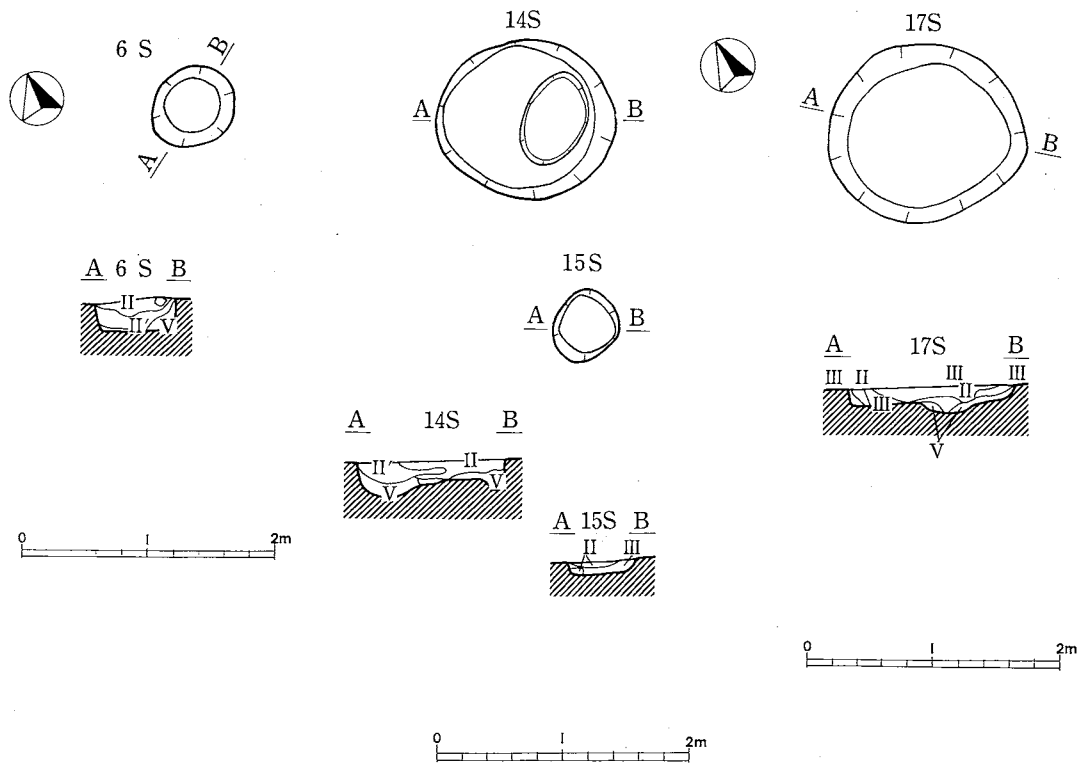
第11図 小竪穴群(1)

- I : 暗褐色土 (焼土・炭混入)
- II : 黒褐色土
- II' : 黒褐色土 (ローム粒混入)
- III : 暗褐色土
- IV : 黒褐色土
- V : ローム (暗褐色土混入)
- VI : ローム



第12図 小竪穴群(2)





第13図 小竪穴群(3)

第2表 小竪穴一覽表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	160×160	不整形	—	たらい状	150×140	平坦 凹凸あり	28	
2	160×90	楕円	N-12°-W	〃	160×80	やや丸底	26	
3	178×126	〃	N-80°-E	〃	140×95	平坦 (小穴2)	40	
4	170×140	円形	—	〃	130×110	平坦 凹凸あり	36	縄文前期の土器1片出土
5	240×176	楕円	N-68°-E	〃	110×78	段々	34	
6	60×64	円形	—	〃	42×45	平坦	32	
7	190×130	〃	—	播鉢状	84×90	丸底	20	
8	160×150	〃	—	たらい状	140×135	平坦	20	
9	90×86	〃	—	〃	80×64	やや丸底	30	
10	196×125	楕円	N-13°-E	〃	170×108	二段平坦	34	
11	360×340	〃	N-40°-E	〃	130×100	平坦 (小穴1)	28	縄文前期の土器4片出土
12	190×160	〃	N-36°-W	〃	180×145	平坦	30	
13	90×90	円形	—	播鉢状	70×65	二段 やや丸底	32	
14	144×124	〃	—	たらい状	120×110	平坦 (小穴2)	27	
15	57×50	〃	—	〃	46×45	平坦	15	
16	80×60	〃	—	〃	50×40	平坦	32	
17	156×140	〃	—	〃	130×110	平坦 (2段)	12	

## 第5節 溝

調査地域に存在する遺構群の南側にあり、ほぼ東西方向に走っている。

ローム層直上の遺構検出面を精査中、調査区南東部の第2号ロームマウンドの南側で、幅1.4mを測る黒褐色土の落ち込みを確認する。プランに沿って落ち込みを追跡したところ、かなり長いものとなり、東側は第1号ロームマウンドの東側まで、西側は第3号ロームマウンド付近で一旦途切れるが、第17号小竪穴付近から再び現われ西側へ延びる。両者はやや方向を異にしているが、ほぼ同一の検出面であり、また覆土も同様であることから同成因のものと思われる。

覆土には砂礫やローム粒を多く含む締った黒褐色土が充填しており、下部へいくほど混入物の割合が多くなる。横断面は東側がトライ状で平底であるのに対し、西側へ行くに従って播鉢状で丸底になる。流れ込みと思われる打製石斧の出土があった。

現在でも調査区の南縁部が周辺では最も低平で東西方向の凹みとなっており降雨時には地表流水があるが、おそらくこの溝もそのような流れの跡であろうと思われる。

(鳥羽嘉彦)

# 第V章 遺 物

## 第1節 土 器

### (1) 縄文・弥生時代 (第14図)

今回の調査では、いずれも少量ではあるが、縄文前期・晩期終末～弥生中期初頭・弥生後期の土器が出土した。縄文前期の土器が小竪穴出土である他は全て遺構外出土である。

縄文前期の土器は2点のみで、図上復元した1は11号小竪穴、口縁部破片3は4号小竪穴より出土した。1は口径40cmを計る深鉢で、体部にはRLの斜縄文が施される。3は口唇外面に連続した押圧を施し、以下縄文を施す。両者とも胎土に長石、石英などの砂粒や小石を含むが繊維は含まない。縄文前期中葉頃の土器と考えられよう。

縄文晩期終末～弥生中期初頭にかけての土器4～16は、無文土器や細密条痕風の縦施文の条痕文土器を主体とし、これに若干の東海的な条痕文土器を伴う。口縁下に無文帯を有する甕形土器4、5は、低突起上に刻目を付すが、氷I式の深鉢にみられるような口縁下の彫刻風の沈線帯は有さない。塩尻市で昨年度発掘した福沢遺跡出土の、氷I式深鉢の退化形態を示すものに類似する。7～13は傾斜のきつい斜方向の細かい条痕を施す土器であり、氷I式の細密条痕的な整形が施されるが、粗雑化の傾向が窺われ、特に7～9などは、松本針塚遺跡出土の条痕壺に類した条痕施文が施される。また、13は壺形を呈すると考えられ、雷文モチーフがみられる。14、15は、胎土に長石、石英粒を含む東海的な条痕文土器である。以上の土器は、氷I式の浅鉢消滅後の、ほぼ針塚遺跡に併行する時期に位置づけられよう。なお、16のみはへう描き沈線によって施文される鉢(壺?)であり、庄ノ畑式に属すると考えられる。君石遺跡は、晩期終末～弥生中期初頭に位置づけられる石行、横山城、白樺などの松本市赤木山の遺跡群に近接しており、この時期の田川右岸の遺跡の1つとして注目されよう。

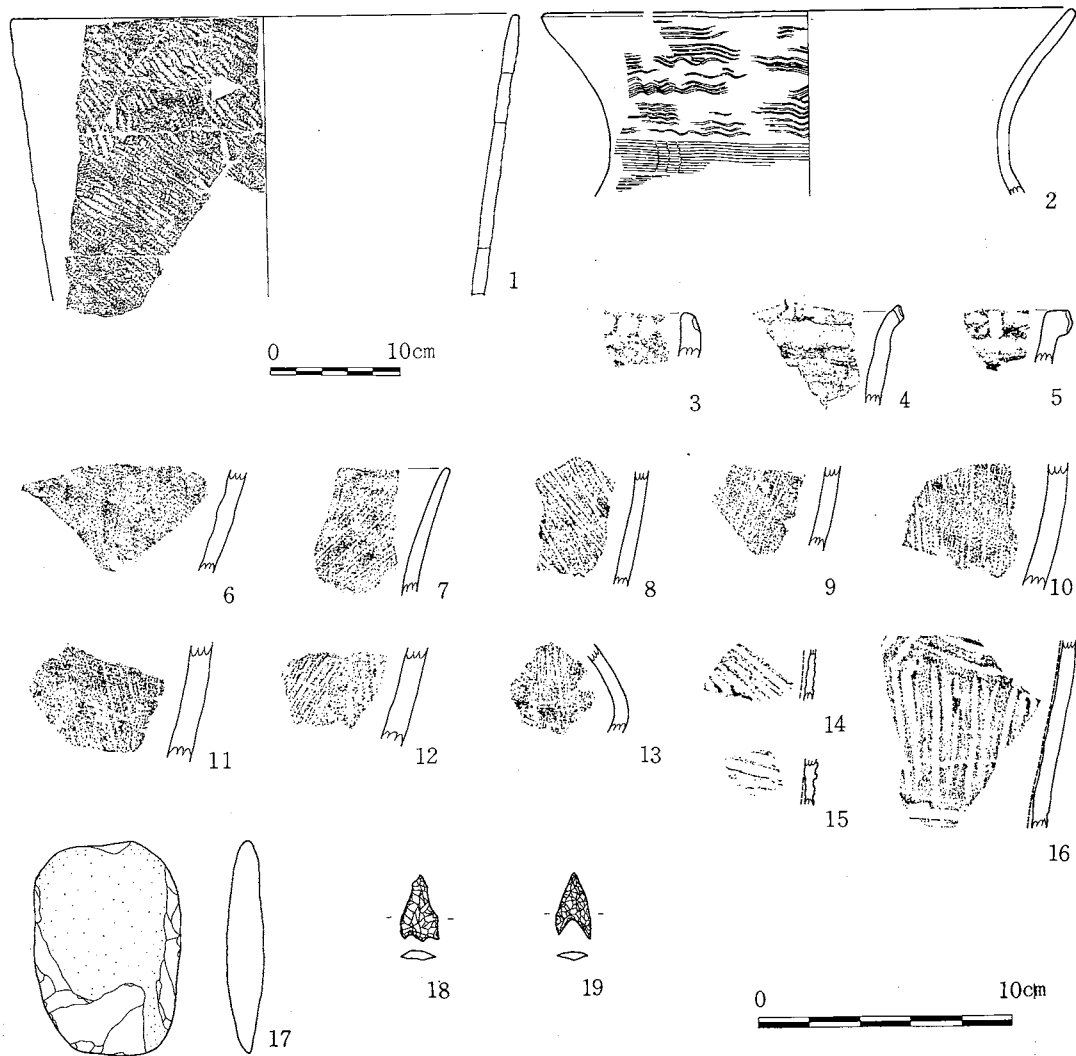
2は弥生後期の甕形土器で、調査区西北隅から出土した。この時期の遺物はこの1点のみではあるが、調査区中心部から方形周溝墓1基が検出されており注意されよう。

(前田清彦)

### (2) 平安時代 (第15図、第16図、第3表)

第1号住居址から良好なセットの一括土器が検出された。ハケメ整形の甕形土器10以外は、いずれも床面直上、もしくは床面付近からの出土であり、住居址内の南側に偏在して出土している。ただし、甕形土器10のみは、カマド内や南壁際の覆土中など、広範囲にわたって破片が散乱して出土した。また、カマドわきの床上10cm程の位置から、鉄製刀子の破片1点が出土している。(第16図)

出土した土器には、須恵器の坏、広口甕、土師器の甕がある(第16図)。1～4は須恵器の坏で、無高台の1、2は回転糸切り、付け高台の3、4は回転へラケズリによって底部が整形され



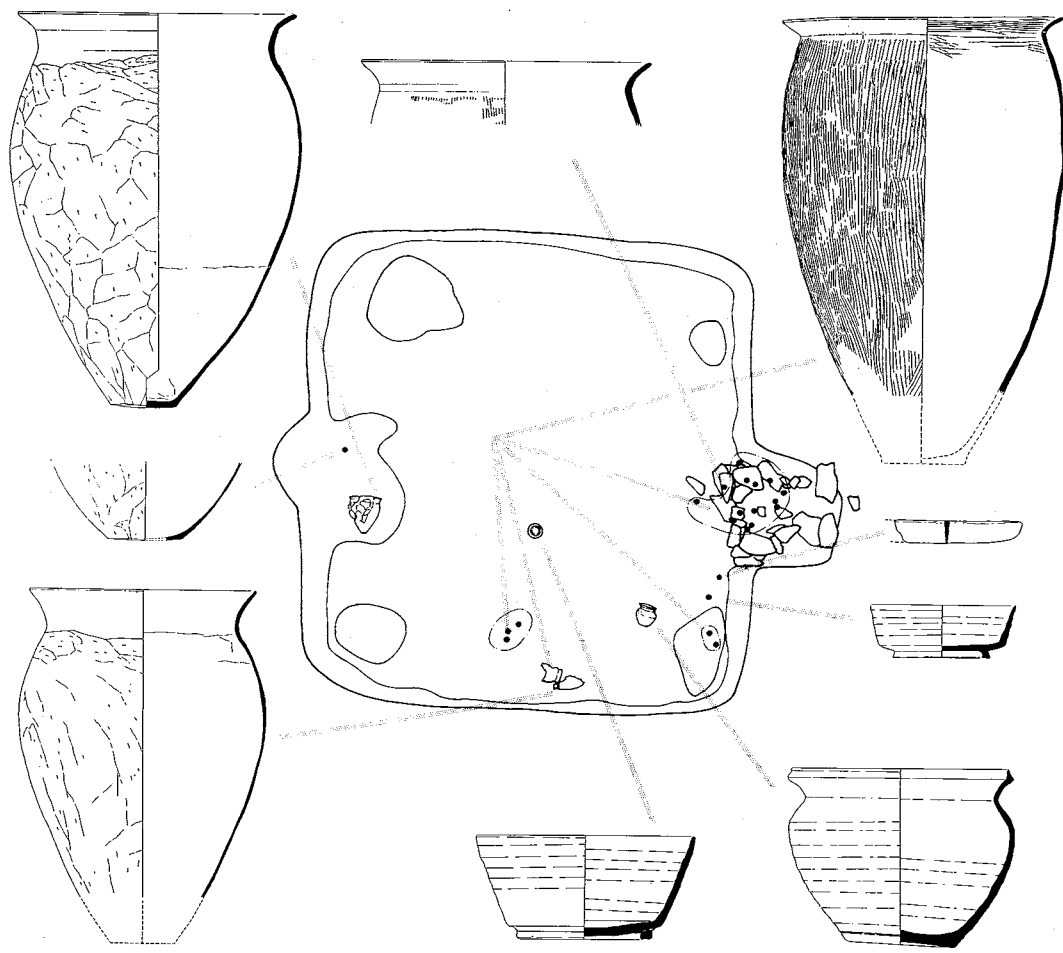
第14図 縄文，弥生時代出土遺物

る。5は須恵器の広口甕（壺）で、底部は回転糸切り、また、外面底部付近は回輪ヘラケズリによって仕上げられる。4、5については完形土器であり、床面直上からの出土をみた。

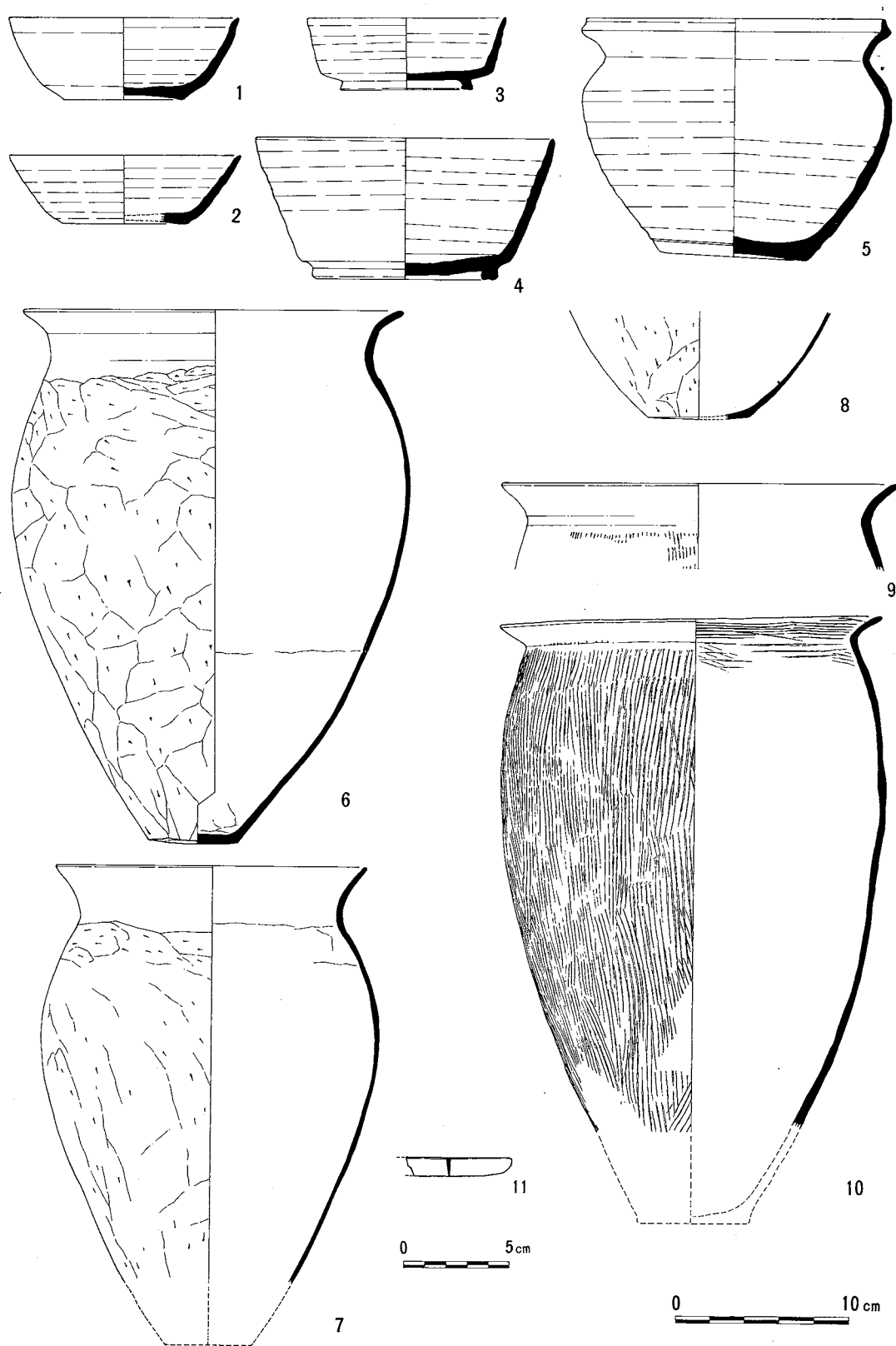
土師器は甕形土器に限られ、ハケメ整形の9、10と、武蔵甕6～8が存在する。完形の武蔵甕6は口縁部の屈曲が「コ」の字に近づくが、7はゆるやかに外方に開く。武蔵甕は3点とも器厚2～3mmを計り薄手に作られ、6、7については内外面とも炭化物・煤の付着が著しい。またハケメ整形の甕10の胴上半外面にも炭化物の付着がみられる。この他、図化してないが、カキ目整形の小形甕の破片が数点出土している。

鉄製品としては、刀子の刃部11がカマドわきの覆土より出土している。

これらの遺物の様相から、第1号住居址は9世紀後半から10世紀前半に属するものと考えられる。  
(前田清彦)



第15图 住居址遺物出土狀態圖



第16图 住居址出土遺物

第3表 君石遺跡第1号住居址出土土器

(単位cm)

番号	種別	器種	法 量			色 調		成形、調整の特徴	ロクロ	備 考
			器高	口径	底径	内 面	外 面			
1	須恵	坏	4.7	13.2	6.7	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ・回転糸切り	↘	生焼け
2	"	"	4.0	13.3	7.1	青灰色	青灰色	"	↘	
3	"	"	4.2	11.4	7.6	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ・ 回転ヘラケズリ	↘	付け高台
4	"	"	8.2	17.1	10.7	青灰色	青灰色	"	↘	"・完形
5	"	広口甕	13.8	17.0	8.4	"	"	ロクロナデ・回転糸切り 底部付近一部回転ヘラケズリ	↘	完形
6	土師	甕	30.8	21.9	5.2	橙褐色/ 黒色	橙褐色/ 茶褐色	ケズリ左→右、下→上が主 底部付近上→下		武蔵型・内外面炭化物、 煤付着・完形
7	"	"	(14.2)	18.0	—	暗灰褐色/ 黒色	暗灰褐色	"		" "
8	"	"	—	—	5.9	灰褐色	灰褐色	"		"
9	"	"	—	22.9	—	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、ハケメ		
10	"	"	(30.6)	22.1	—			ロクロナデ、ハケメ 内面カキメ		胴部上半外面炭化物付着

## 第2節 石 器

今回発掘調査によって出土した石器は打製石斧1、石鏃2の計3点と極めて少量である。また3点ともすべて遺構外からの出土である。

打製石斧17は原石面を多分に残し、整形のための打痕も少なく粗雑なつくりである。石鏃18は有茎石鏃であるが、茎部のつくり出しは余り精巧ではない。石鏃19は脚部を若干欠いているが、平面形が二等辺三角形をなす精巧なつくりのものである。(龍堅 守)

番 号	発掘区	種 別	材 質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
17	B - 7	打製石斧	頁 岩	8.5	5.7	1.1	100.0	
18	B - 9	石 鏃	黒 曜 石	2.6	1.4	0.3	0.9	
19	C - 6	"	"	2.5	1.5	0.4	0.9	

## 第Ⅵ章 過去の出土遺物

今回調査を行った君石遺跡は、既に昭和41年に別地点が発掘されており、その成果は概報として報告済みである<sup>註1</sup>。当時の調査拠点、今年度の発掘地点からは窪地を挟んでおよそ100m南側にあたり、南北方向に設定された2本のトレンチからは、縄文晩期末～弥生中期の土器・石器及び平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器が出土した。明確な遺構の存在は認められなかったようであるが、その出土物は、今年度の調査によって得られた遺物と時期的に共通する。前回の報告では、遺物の実測図・拓本についての掲載がなされていないため、今回この場を借りて報告したい。この他、晩期終末の大形甕形土器1点が、昭和32年に耕作中に発見されている。

### 晩期終末～弥生中期の遺物（第17図）

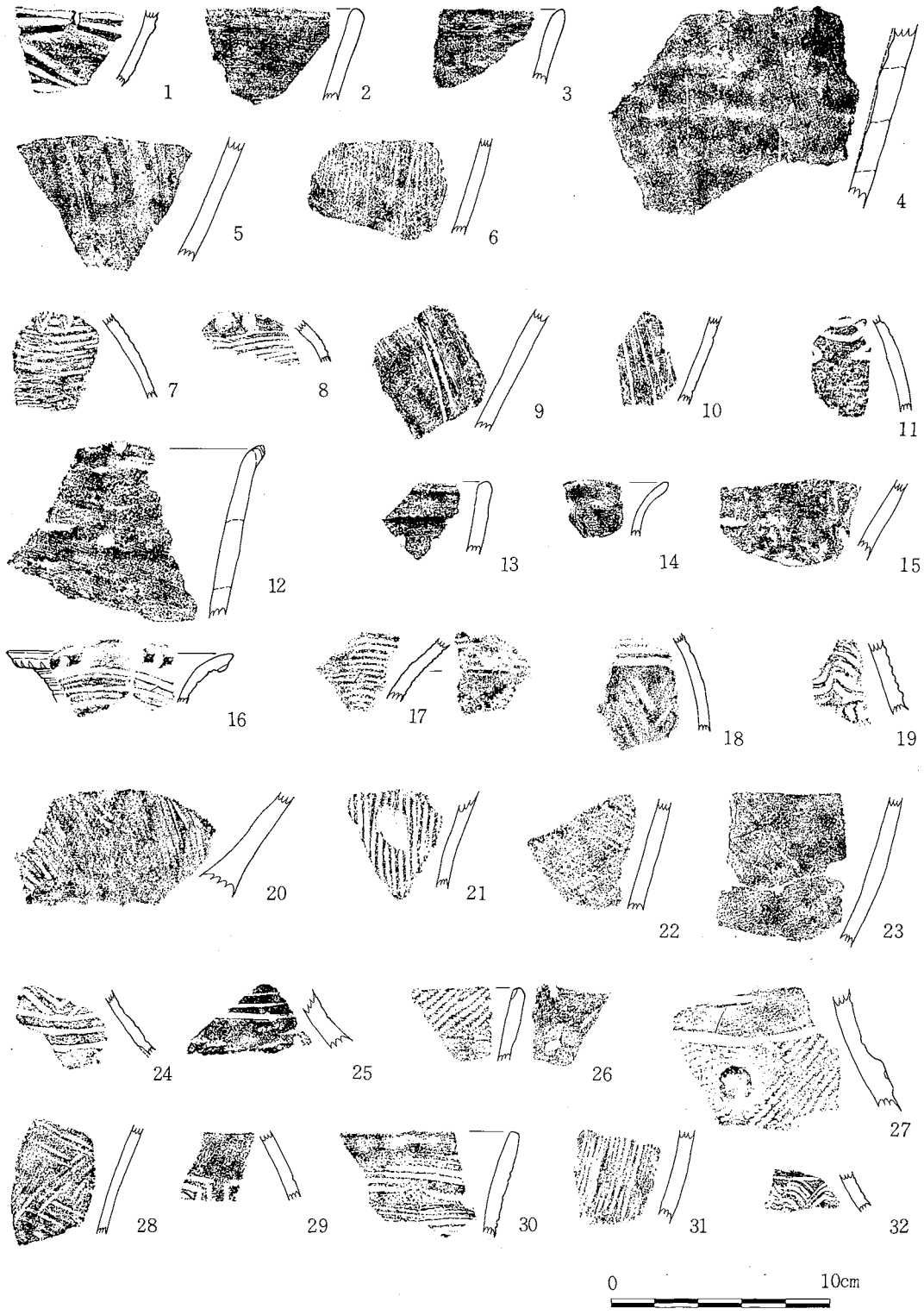
昭和41年発掘の遺物は、第1トレンチ3区、第2トレンチ5区・7区を中心として出土し、その出土土器は地点ごとに時期差が認められる。

第1トレンチの3区（1～6）、及び第2トレンチ7区（7～15）出土の土器は、無文深鉢2～5、15や氷Ⅰ式と退化形態の深鉢12・13また粗雑化した細密条痕風の条痕文土器6・9・10を主体としほぼ今年度の調査による出土土器に近似する。浮線文土器の破片が1点みられるが(1)、水神平式類似の波文を有した貝殻条痕文土器(7)も発見されており、これらの土器の多くは松本市針塚遺跡の遺物に併行するものと考えたい。また、昭和32年出土の深鉢33も氷Ⅰ式の退化形態であり、この時期に属するものと思われる。なお、8・11は2トレ7区の出土ではあるが、庄ノ畑期、阿島期の混入品と考えられる。

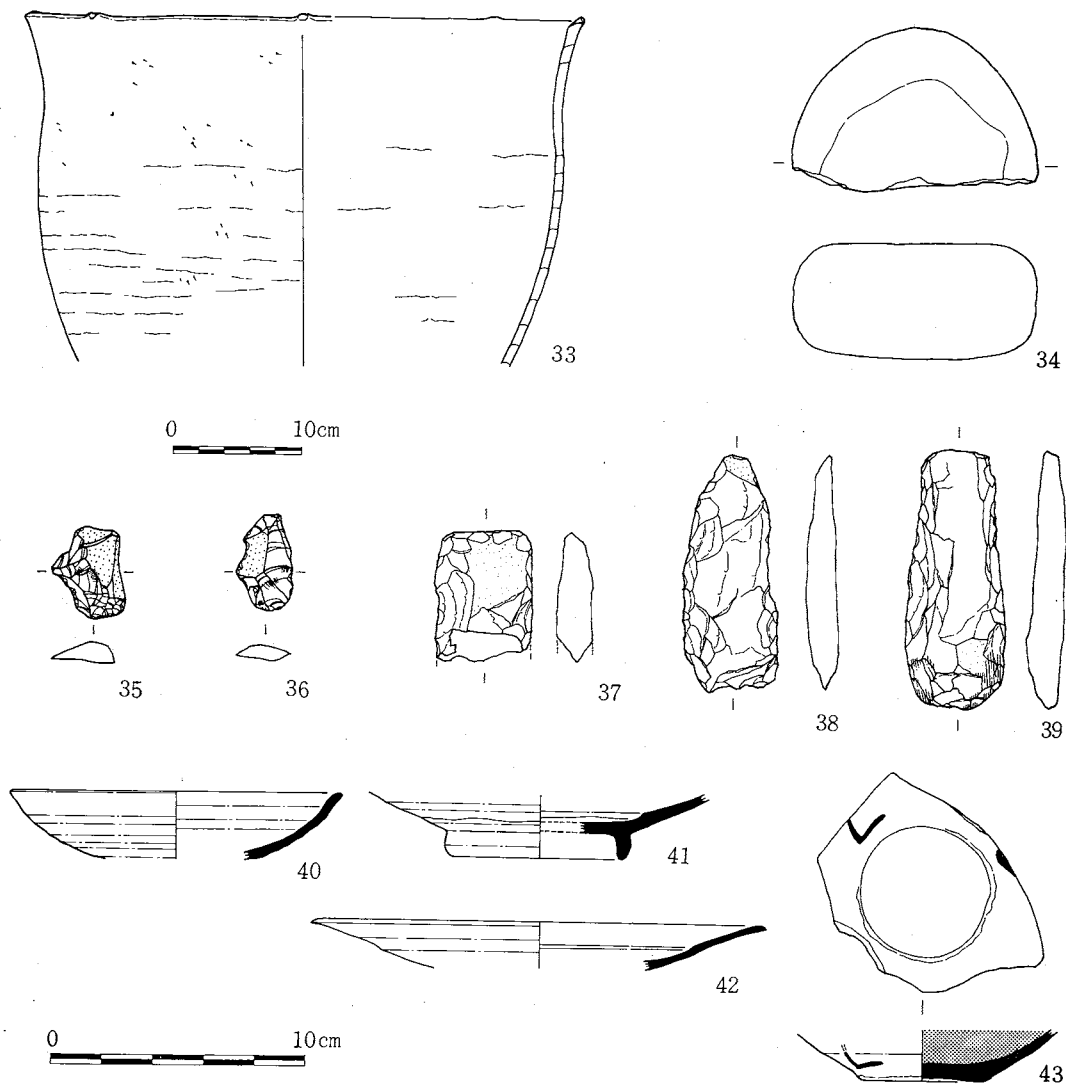
次に、第2トレンチの5区（16～28）を主体として、同トレンチの1区（30）、3区（31、32）から出土した土器群は、条痕文を主体として、これに沈線文、縄文施文の土器が伴う。庄ノ畑期に属すると思われる土器が多いが、ボタン状貼付文を付す壺27や、横位羽状条痕土器28は若干時期が下ると予想されよう。16～19、32は壺形、20～22、30、31は鉢形を呈すると考えられる条痕文土器で、19、32は肩部に波文を有し、17は口縁部内面にも横位条痕が施される。これらの条痕は、17については二枚貝腹縁の可能性を有するが、他はいずれも櫛状工具もしくは棒状工具、植物茎を並べた施文具により施される。また、26は口縁部を若干肥厚させLR縄文を付し、口唇内面に棒状工具のオサエを施す鉢（甕）形土器で、針塚併行期におかれる可能性もあろう。この他29は、出土地点不明の土器片で、変形工字文もしくは重四角文と考えられる文様が沈線によって描かれている。

石器は、表採品も合わせて5点の出土をみている。内訳は、スクレイパー2点（35、36）、磨石1点（34）、打製石斧3点（37～39）である。打製石斧39は第1トレンチ3区、スクレイパー2点が第2トレンチ5区からの出土であり、その他は表面採集によって得られた。





第17図 過去の出土遺物(1)



第18図 過去の出土遺物(2)

平安時代の遺物 (第18図)

第1トレンチ1区、第2トレンチ1区、3区から、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。40、43は土師器の坏、41、42は灰釉陶器で、底部に回転糸切り痕を有し内面黒色処理を施す土師器坏43には墨書が認められる。外面の2ヶ所に墨書の痕跡を留めるが、欠損が著しいため字句の内容は不明である。また、図示していないが、この他、土師器甕、甲州形坏、須恵器大甕、灰釉椀の破片なども出土している。

(前田清彦)

註1 1966 鈴木誠ほか 「松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告」

## 第Ⅶ章 ま と め

扇状地末端に位置する君石遺跡は、田川から550mの地点にある。縄文時代前期から平安時代にかけての遺跡で、1,200m<sup>2</sup>と調査面積は狭かったが遺跡立地を考えるうえで注目すべき成果が多く得られた。

君石に最初の足跡を印したのは縄文前期の人々であった。しかし、その痕跡は微々たるもので、長期間の滞在ではなかったろう。ある程度の期間、この地に留まり、生活を営んだのは、縄文から弥生へという大きな時代の過渡期の頃の人々であった。それは、今回の調査地域から昭和40年に調査された地域にかけてのやや広い範囲にわたり、時期ごとに地点をわずかず異にしている。近時、松本市赤木石行、塩尻市別方など近隣地域からも該期資料の発見が相次ぎ、遺跡の絶体数が極端に僅少といわれているこの時期の遺跡が赤木から君石にかけての小地域にかなり濃密に分布していたことが判明した。その後、弥生時代後期の土器が得られているが、性格を論ずるには資料が少ない。ただ、1基発見された方形周溝墓が、この時期のものとするれば、集落は墓域とは別の地域、たとえば以前完形の土器の出土もある田川流域の野村周辺に展開していた可能性が強い。方形周溝墓は、谷をはさんだ赤木白樺と田川をはさんだ丘中学校で発見されており、ともにやや小高い地点に墓が構築されたことが分かる。これらの方形周溝墓は距離的には短距離にあるが、それぞれ自然地的には隔絶した場所に立地しており、これを構築した集団を異にしていたものと思われる。今後、墓地の背景にみる人間集団・社会組織を考えるうえで、貴重な資料となろう。

平安時代には、たった一軒ではあったが住居が検出された。9～10世紀と比定されたこの家は、床面上および覆土中に土師器、須恵器の良好なセット資料が残されており、該期の土器研究には好資料となろう。また、最近話題となった吉田川西遺跡や吉田向井、丘中学校遺跡など多くの住居址が検出された大集落址と君石のような小集落との関連性も考察の対象としていかなばならないだろう。

(小林康男)



君石遺跡遠景



全景(発掘前)



調査地区全景



表土除去



平安時代住居址



住居址出土土器



方 形 周 溝 墓



第1号ロームマウンド



調査開始式



発掘作業風景



---

# 君 石 遺 跡

— 両内田地区県営圃場整備発掘調査報告書 —

昭和61年 3 月20日 印刷

昭和61年 3 月22日 発行

発行 塩尻市教育委員会

印刷 ㈱ 高砂印刷所

---



不  
定  
品

地  
月  
下  
暴  
雨  
雲  
集  
全